

理学療法士はプロフェッションと言えるのか、そもそもプロフェッションとは何か、超情報化社会は人々の価値観や生き方に影響を及ぼしている。医療を取り巻く社会は時代とともにさま変わりし、理学療法士のはたらき方は医療制度をはじめ、社会環境の変化に大きく左右されながら今に至っている。女性理学療法士も多くなった。理学療法士は個々の多様性に合わせて生活の充実を図る一方で、プロフェッションとしての資質の向上を図り、組織の一員として組織の成長に貢献していく責務をもつ。

■新時代のプロフェッション(高澤文俊論文)

プロフェッション概念の歴史を概観し、理学療法士がプロフェッションであることおよびプロフェッションの概念を整理して論じたうえで、現行法における規制と新時代において生じた問題とその対処法を、公共善の追求と高度の倫理性というキーワードから明らかにする。

■自己実現と理学療法士(永富史子論文)

「自己実現」は、人間欲求の最高段階と位置づけられている。「人間の欲求」、「精神の健康」、「自己実現」が理学療法、そしてはたらくこととどのように結びつくのかを考えた。自己実現は必ずしも、仕事だけに関連する欲求ではない。人間として、生活者として、理学療法士として、われわれに何ができて、何を期待されているのかを考え、自己実現を各人で具現化してゆくことが求められる。

■組織と理学療法士(大垣昌之論文)

病院機能分化や地域医療構想など医療・介護を取り巻く環境は大きく変化している。また、個人の価値観も多様化し、また組織の考え方もさまざまであり、個人として、理学療法士としての価値観と組織の価値観が必ずしも一致するわけではない。組織の構成員として組織に属するとはどういうことなのか、組織形成に必要なことは何かについて述べた。

■女性理学療法士の職場環境と課題(岩崎裕子論文)

日本の理学療法士は男性6：女性4となり、女性が増加してきている。男性に比べ、女性は結婚、出産・育児、介護などのライフイベントにより働き方を変えなくてはならないことが多い。そのような状況においては、個人は自身のキャリアや仕事をどのようにしていくかを考え、職場はコストをかけて育成した人材をどのように定着させるかも考える必要がある。そこで、個人の視点と職場の視点から、産業・組織心理学の知見を引用し、女性理学療法士の職場環境と課題について述べた。

■座談会：理学療法士としてはたらくということ(吉尾雅春、張本浩平、松葉好子、渡邊亜紀)

公立病院のベテラン管理者、私的病院勤務の中堅リーダー、訪問・セミナー事業の起業家の理学療法士3名を交えて座談会を行った。社会情勢の変化や人々の価値観の変化に伴い、理学療法士を取り巻く環境も大きく変わってきた。そのような不安定な中でプロフェッションとして理学療法士はどうあるべきか、理学療法士としてはたらくということはどういうことか、意見交換した。